

白井吉見に大きな影響を与え、常念岳登山の基礎を築いた校長

佐藤 嘉市（さとう かいち） 下高井郡高野村（現飯山市）

（嘉市が活躍した時代） 1877(明治10)年～1959年(昭和34年) 享年 82歳

明治			大正					昭和							
10	32	41	4	5	6	7	8	12	34						
ま れ る。	現 在 の 飯 山 市 に 生	郷 里 で 教 員 と な る。	小 学 校 校 長 と な る。	常 念 岳 を 見 て、 感 動 す る。	堀 金 尋 常 高 等 小 学 校 校 長 に な る。	校 内 に 常 念 岳 研 究 会 を 作 る。	登 山 を 行 う。	常 念 岳 第 一 回 団 体	作 り の 寄 付 を 募 る。	常 念 岳 登 山 道・ 石 室	戻 る。	郷 里 に 校 長 と し て	退 職 す る。	様 々 な 教 育・ 文 化 活 動 に 取 り 組 む。	死 去 8 2 歳

『白井吉見』と『常念校長』



「校長は漆黒の長いあごひげのある眼光らんらんたる国士ふうで、毎週月曜日の朝会には、『常念岳を見る。』ということしか言わなかった。・・・(中略)・・・この常念のことしか話さなかった校長の呼びかけによって、今までとは全くちがった思いを山によせるようになった。おおげさにいえば、常念岳によって新しい精神の世界を発見したのである。」（白井吉見著『どんぐりのへた』より）

安曇野を代表する小説家「白井吉見」が嘉市に出会ったのは、小学校3年生の時でした。嘉市の思い出を、吉見は自身の作品や講演の中で、折に触れ紹介しています。白井吉見の素晴らしい文学の世界に、嘉市は少なからぬ影響を与えたのでした。

今も嘉市の教えは生きている

村人や子どもたちから『常念校長』と呼ばれた嘉市は、常念岳を教育のよりどころとしました。嘉市の思いを受けて、当時の小学校職員が大正六年頃に堀金小学校の校歌を作りました。常念岳のような大きな理想を持ってと説いた校歌は、今も堀金小学校の子どもたちに歌われています。

一八重の白雲押ししのぎ
そびゆる日本アルプスの
気高きほうらんそが中に
いただき高く天をつく
常念岳の雄々しさよ

三ここに集える学び子よ
立てよ理想は山のごと
みがけ心は川のごと
きたえにきたえて金鉄の
光を四方に輝かせ
(堀金小学校校歌より)

参考文献

安曇野市 HP「安曇野市ゆかりの先人たち」
堀金村誌 堀金小学校百年誌

常念岳の登山道整備と^{いしむろ}石室建設を進めた

嘉市は、校長になってから個人で8回常念登山に挑戦して初登頂に成功すると、村人に呼びかけて集団登山を行いました。まだ、普通の人々が楽しみで登山をするのが珍しい頃のことです。

更に、堀金小学校の職員を中心に作った常念岳研究会の会員とともに、資金集めをしながら、自ら先頭にたって常念岳の登山道を切り開き、石室建設の場所を決めました。たくさんの村人の協力を得て、大正7年に登山道が開通、大正8年に石室が完成しました。



国営アルプスあづみの公園内に復元された石室